神の愛に還らなければならぬ、神と合一しなければならぬ。その合一を求める事が、我等の自己の目的である。それを失ふ事によつて得、服従する事によつて起たねばならぬ。子供がその母に戻る事が出來ないならばその外遊びは危險であり恐怖であらう。我等の個性の誇は之を愛の中に棄てなかつたら我等にとつて呪となるであらう。

(五) 愛に於ける實現

さて我等は今有限と無限、神と人との共存といふ永久的な問題に到着した。一體存在の根柢には一の矛盾が横つてゐる。それは論理の上に於てこそ容易に片附ける事の出來無いものだが、しかし實在に於

ては問題にはならない。論理的に云へば、二點の間の距離はどんなに近くとも、無限であるといふ事が出來る。何となればそれは無限に分割する事が出來るからである。けれど我等は實際に於ては一歩々々無限を踏んでゐるのである。又、時間的にも一分毎に永遠に面してゐるのである。それ故我等の哲學者の或者は、有限と云ふものは無いと言つてゐる。それは即ちマーヤーで、非眞理である、眞理は無限であると言つてゐる。だが、これはどうして有限と無限とが共存するかといふ問題に對する解釋とはなつてゐない。サンスクリットにドヴァンドヴァといふ言葉があるが、これは積極と消極、求心力と遠心力、引力と斥力の樣に宇宙には反對せる一對の力があるといふ意味なのである。これも亦單なる名辭で說明にはなつてゐないが、一度論理を超越して

考へる時、世界はこれ等の二つの反對力の調和によつて成立つてゐる事が肯定される。これ等の力は丁度創造主の左右の手のやうに絶對的調和の中にあるのである。

若し宇宙が混沌たるものならば熱と寒、光と闇、靜と動、低と高、――現象界に於けるこれ等の相反せる原理は、互に克たう〳〵とのみ爭うてゐるであらう。その間に何の調和も連鎖も見出せない筈であるが、實際はさうでない。すべての力は皆平衡の狀態に歸つて來る、浪は相爭うて高くあがる、しかしそれは或る程度迄に過ぎない、やがて海の大なる平靜にかへるのである。この宇宙界に於けるあらゆる動搖、あらゆる起伏は、決して不等なる物體の奇怪なる歪みから來るのではなく、その韻律的舞踊なのである。韻律は決して爭鬪の狂態から生れるもの

ではない、融和合一の原理から生れるのである。

斯くの如く、すべての矛盾も反對も其の根柢に於ては合一してゐる。この合一の原理こそ神祕の中の神祕である。此の神祕を感じ得た時、人は油然として心の底より湧きあがるよろこびを感じる。しかも多くの人は、この神祕を感ずるの感情を失つてゐる。例へば林檎の落つるを怪んで引力の法則を知るが、その法則の奥にひそめる此の神祕を感じる事が出來ない。而して、此の法則を以て實在の終局なりと考へる。而して法則は我等の智性に滿足を與へるのみであつて、我等の精神の自由には何の貢献する事もない、我等のうちに潜んでゐる無限の感じは、寧ろこれによつて殺されて了ふのである。

立派な詩もばら〳〵に解き放つ時は、唯音の一列に過ぎない。これ

等の外的音響を結合する處の內在的媒介者たるその意味を見出した讀者は、全體を貫く一の完全なる法則をみとめる。それは觀念の發展の法則、音樂と形式との法則である。斯くの如く法則はあらゆる現象の底を一貫して流れてゐるが、法則それ自身は必らずしも究竟地を指してゐるものでは無い。法則はそれ自身一の制限である。法則はただ存在するものはそれ以外にあり得ないといふ事を示すものに外ならない。人が專ら因果律の鎖を探す事に腐心してゐる時に、その心は事實の壓制から遁れて法則の壓制に屈するのだ。文典は文學ではなく、韻律學は詩ではない。文學は文典の法則を一度はくぐらなければならぬ、音樂は韻律學の狹い門を一度は潛らなければならぬが、文學が文學たり、音樂が音學たらんには、法則を浸透して、更に法則を超越し、法

則を支配しなければならない。そこに眞の自由がある、法則は實に自由に至るの第一歩である。眞の自由のあるところ、そこに美がある。美はその懷に、制限と無制限と、法則と自由とを調和するのである。

此の宇宙の法則——唯それを知つた丈では駄目だ。それを超越しそれを支配するところの終局の眞理を知らなければならぬ。而して此の世界は神のよろこびの溢れによつて創られたるを知るもののみが、この終局の眞理に達するを得るのである。

此の事は人間の心と自然との關係の如何に神祕的なるかを私に思はせる。外面の活動世界で自然は一の方面を有つが、我々の心の中には、內面世界には、それは全く異つた光景を示す。

たとへば植物の花である。それはいかにも美しく見えるが、併し一

つの或る大切な仕事――果實を結ぶといふ仕事を有つてゐる。美しい裝ひと芳ばしい香とは美女の驕れるにも似てるが、實際は太陽と夕立雨の下に働く勞働者なのである。しかし此花が人の心に映ずる時、極まりなき活動の表象たるそれは、美と平和の完全なる表現となる。卽ち花は、自然界へは、十分働けるといふ推薦狀を持つてやつて來るが、人間へは美といふ資格を具へたものとして、全く別な紹介狀を携へて來るのである。一つの場合には奴隷として來り、一つの場合には自由なものとして來るのである。而して奴隷として來た時我等の心はそれを斥ける、自由なものとして來た時はこれを迎へる、それは何故であるか？外的には花は因果律――法則の鎖に縛られた奴隷である、これは外的の眞理である。が、內的の眞理は、眞の限り無き喜びより總ての

ものは生るゝなり。」で、花は美であり自由である。

ラーマーヤナの物語の中で、無理矢理にその戀人から引き離されたサイテエ姫が、ラヴアナの黃金の宮殿の中で其身の不運を嘆き悲んでゐた時に、その戀人のラームチヤンドラの指環を携へて來た使に會ふ。そして一瞥して、其のおとづれの眞意を悟つた、又、何とも云はれぬうちに、此の使が、自分を救ひに來た戀人からのそれである事を悟つた、といふ事があるが、花は、人類の大なる戀人から來るところの斯うした使なのである。我等が世間の榮華に誘れて其の花嫁たらんとしてまどふ時、花といふ使が彼方の岸から渡つて來て吾等に囁く。「私は參りました。私は美の使であります。愛の祝福の靈を有てる者の使であります。此孤獨の島は彼によつて橋を架けられました。そして彼はあな

たを忘れませんでした。彼は汝を呼び寄せて彼の妻とするでせう。この幻影は、永久にあなたを奴隷の鎖に繋ぐやうな事はないでせう。」

若し我等が其時覺醒すれば、我等は彼に訊く。「お前がほんとうに彼から來たといふ事を私共はどうして知らう。」使は云ふ「御覽なさい、私は彼からの此の指環を持つてゐます。」と。

これこそ眞に我等の婚禮の指輪なのである。今は總て外の事は忘られて了ひ、唯この永遠の愛の接觸の象徴が、深い憧憬を以て我等の心を充たす。我等は我等の住む黄金の宮殿が、我等に用の無い事を、我等の救ひはその外にある事を、そしてそこに我等の愛はその成果を遂げ我等の生はその完成を遂げる事を實現するのである。かくて、花は、蜜蜂などには單に色と香と、蜜を尋ねて行く可き目標に過ぎないが、の人

心には、必要に束縛されない善と喜びとになつてはひつて來る。彼等はさま〴〵の色インキで書かれた戀の文を人の心に齎す。斯くの如く外面には如何にも忙しさうに見える自然も、人の心の中には、自由に出入出來る祕密の室を有つてゐて、そこではその仕事場の焰は祭りの燭となり、その工場の喧騒は樂の音となるのである。

自然はそのやうに反對した――――一つは奴隷狀態の、一つは自由の、この二つの方面を同時に有つてゐるのである、同一の形や音や色や味の中に、全く反對した――一つは必要の、一つは喜悅の、二つの調子を聽く事が出來るのである。外觀的には自然は忙しく隙もないが、內面的には靜肅にして平穩である。外から自然を見る時その束縛をのみ見るが、內から見れば、そこに自由があり、無限の美がある。我等の豫言者は

曰ふ。「喜悅よりすべてのものは作られ、喜悅によつて彼等は支持せられ、喜悅の方へ彼等はずゝみ、且つ喜悅の中へ彼等は入るなり。」と。而して喜悅の別名は愛である。

この愛の喜悅は、その實現のために二元の相を有たなければならない。たとへば音樂家が神興に乘じた時、彼は自己を二つに分ける、彈奏する自分の他に、聽手としての自分を有つ。そして彼以外の聽手はこの他の自己の外延に過ぎないのである。それと同じ事で、人が戀をする時、其の戀する者の中に、他の自己を見出す、而してこれと合一しようとするのである。

人の靈魂と宇宙の靈魂との關係も亦そのとほりで、宇宙の靈魂、即ち神はその愛のあふれから人を派生する。即ち神自身の別種の自己と

して人を分つたので、人の靈魂は實に神の戀人である。若し此の分離が絶對的であつたならば、遂に合一する事の出來ぬものであつたならば、世界は不幸に充ちてゐるのであらう。けれども、神が人を分つたのは愛せんがために分つたのである。喜びのあふれから分ち創つたのである。

音樂者はその喜びを、唱歌といふ形式に飜譯する。聽衆は、唱歌をその喜びに飜譯しかへさなければならぬ、其時のはじめて音樂者と聽衆との間の完全なる交渉は成立つ。無限の喜びは種々の形式に於てそれ自らを顯はし、法則の束縛をそれ自らの上に取りつゝある。我等は形式から喜びへ、法則から愛へ戻る時、即ち有限の結び目を解いて無限へ還元する時に、我等の運動を全うする事が出來るのである。

人間の魂は法則から愛へ、道德的平面から靈的平面への途上にある。佛陀はまた法則を完全に受く可き事を說いた。が、しかし法則を受くる事、それ自身が目的である事は出來ない。我等は法則を超越して自由の境地に入らなければならない。それは卽ちブラマに歸る事だ、無限の愛に迚り入ることだ。で、佛陀に從つてこの域に達せんとするものは、詐つてはならぬ、憎んではならぬ、怒つて人を害せんことを思うてはならぬ、すべての被造物に對して無限の愛を持つてゐなければならぬ。どこまでも限界なく愛を擴げなければならぬ。行住坐臥、此の宇宙の善意を行はんと心掛けて居なければならぬ。愛は完全な意識である。我等は悟らないから愛せぬのである。寧ろ愛しないから悟らないのだといつた方がよいかも知れない。何となれば愛は我等を取

り圍むあらゆる事象の究極の意義であるからである。愛は單に一つの感情では無くして眞理である。萬物の根柢にある喜びである。ブラマから流露する純意識の白光である。

何よりも先づ愛しなければならない。しかし、私達の愛は功利的であつてはならない。功利は一時的部分的である。功利的の愛、卽ち必要なるものとして與へられ受入れられた愛は、其の必要がなくなれば却て邪魔になり重荷になる。けれども心の奧底から出た愛は永久の價値を有つてゐる。何となれば愛それ自身の內に目的があるからである。それは全實在的の愛であるから、決して飽かるゝ事はない。

さて如何にして我等は愛の賜物たる此の世界を受く可きであらうか。若し我等が、此の世界を利用せんとのみはかり、此の世界に所有權

を擴げようとのみあせり、此の世界をして損得を爭ふの市場とのみなさうとしたならば、此世間は人間にとつて眞の價値を失つて了ふに違ひない。

食人種の國では人間を見れば食物だと思つてゐる。が、世には文明國の假面を被つた食人國が多い。人を唯單なる肉體として評價しそれを機械扱ひにしてゐる國が少なくない。斯くの如きは人間が自己の靈魂を犯すところの非常な罪惡である。勿論人は人にとつて有用である、けれども人はまた靈魂である事を知らなければならぬ、而して、人は靈魂であると知る時、我々は他も亦我々自身である事を悟るのである。即ち人を殘忍にとり扱ふのは自己を殘忍にとりあつかふ事であり、人を蔑視するのは自己を蔑視するのであるといふ事を悟るのである。

私は一日、秋の美しい夕暮を恒河の上に遊んだ。夕陽が落ちたばかりで沈默せる空にはまだ夕榮の名殘が一面にたゆたうてゐた。其時靜かな水の面に一尾の魚が大きな波紋を立てゝ跳り上つた。而してやがて水底深く沈んで仕舞つた。沈んで了つたあと、波が美しい色の漣を疊んで、そこに生命のよろこびにあふるゝ靜肅の世界があつた、それは神祕の奥底から浮び上つた世界であつた。喜びのおもひが私の心に湧きあがつた。其の時突然、舵をとつて居た男が叫んだ。「あゝ、大きい魚だつたなあ！」其男は其の魚が捕はれて晩餐の膳にのぼる光景を描き出したのである。彼は慾の目ばかりで魚を見てゐたのだ。だからその存在の眞實を見失つて了つてゐる。私達が眞實に魚を見る

事の出來ぬのは畢竟魚に對する愛を感じてゐないからだ。欲望によつて自己を狹め、それを神と通はするところの路を塞いでゐるものは禍なる哉。

文明の進歩如何を定むるは、機械として人を見るよりは何れ丈多く靈として人を見るか、の點にある。文明の頽廢は、いつも人間の價値を蔑視することからはじまつてゐた。宇宙に對するも亦これと同じで、我々が慾望の面帕を被つて見る時、その眞相は之を認むる事が出來ない、卽ち唯功利とか必要とかの一面のみ見たのではその眞相はわからぬのである。我等は必要といふよりはもつと深刻な、もつと眞實な關係に於て世界に連つてゐる。卽ち愛の關係である。合一の關係である。もし我等が世界を敵の如く考へ、世界との合一を無視してゐたな

らば、我等の生存は忽ちほろぼされて了ふに違ひ無い、世界との合一の完全な認識が單に知識上にばかりでなく、我等の全人格が萬物の輝きある一意識の中に開けたる時、光輝漲る喜びとなり溢るゝばかりの愛となり、我等は全世界を包容する偉大なる自己を感じ、不死の確信にまで導かるゝであらう。

愛によつて實在のすべての矛盾は消滅し、純一と二元とは相剋せるものでなくなるのだ。愛を發見する事によりて我等ははじめて安住の所を得る。が、この安住は決して幻影、沈靜、停滯ではない。それ自身、强烈なる活動の中に平和を有つてゐるのである。而して愛の中にのみ、損失と利得とは調和する。其の計算表には貸方と借方とが同じ欄の中に記される。戀人は愛の中に自己を得ようとして、たえず自己を

其中に棄てゝみる。受くる事と棄つる事とは、愛に於て全く合一する。

愛の他の一の特徴として、愛は自己的であると同時に非自己的である。私達は一方に於て積極的肯定――即ち「我茲に在り」と叫び、他方に於て同様に強烈な否定を以て「我はあらず」と叫ぶ。此の自己無くしてどうして愛すといふ事が出來よう。が、この自己のみでどうして愛し能はう？

愛にあつては、束縛と自由とは其性相容れぬものではない。何となれば愛は最も自由であると同時に最も非自由であるからである。又、單に自由と束縛とのみでなく、現象界のあらゆる矛盾とあらゆる相剋とは愛に於て純一の境に入り、調和の境に入るのである。

（六）行爲に於ける實現

喜悅は法則に從ふことによつてそれ自身を發現する。それと同じく、我等の心靈も行爲によつてはじめて自由に表現さるゝのである。何となれば、心靈は心靈それ自身の中に自由を求むる事は出來ない、外的活動によつてはじめて自由を得るからである。人の靈魂は絶えずその活動によつて、それ自身の束縛から自由にされつゝあるのである。

人は行爲により、隱れたものを實現すればするほど、將にある可き筈の理想を一歩々々、より近く人生に近づけてゆく事が出來るのだ。即ち行爲によつて、自己をいよ〳〵明かに意識する事が出來る。で、自己

を明かに意識するのは、即ち自由を得る所以である。

「自由は闇の中にはない茫漠とした境にはない。この闇と茫漠とを脱する事によつてはじめて自由は得られるので、彼の種子が芽生えんとするのも、蕾が綻びようとするのも、皆この茫漠を脱して、自由を得んが爲に外ならない、我等の心靈が絶えず活動の新しい世界を創造しつつあるのもこれと同樣で、心靈の自由を得んが爲に外ならない。行爲の中に解放せられて、心靈は初めて自由になるからである。ウバニシヤドは云つてゐる。「勞作の中にありてのみ汝は百年も生きんことを思ふなり」と。これは實際心のよろこびを經驗した人の云ふ事である。完全に心靈を實現した人は、人生の悲哀や、勞作の束縛について語る事は無い。彼等は實を結ぶ前に落ちる弱い花托をもつた花のやうなものではない、彼等は飽迄も生命に執着して、實が熟れる迄は決して放れない」と云ふ。彼等も亦、彼等の生活の中に、彼等の勞作の中に、專念彼等自身を表現せんことを欲求する。苦痛も悲哀も彼等を恐れしめる事は出來ない、又その慾念の重さに、現實界の塵埃の上に頭を下げるやうな事はしない。深いよろこびを透して輝く心靈の光輝の中に彼等自身を見出し、それを表現しつゝ、凱旋の將軍の如く毅然として人生の眞只中に進み入るのだ。彼等の生の歡喜は、日光の歡喜、自由なる空氣の歡喜と相混じつゝ內と外とに一つのなだらかなる調和の世界をつくるのだ。

而してこの生の喜び、勞作のよろこびこそ我等にとつての絶對の眞理だ。我等が內なる世界に於て把握し得たブラマの境は、勞作の中に

のみ實現することが出來るのである。活動の世界からはなれて無限を實現する事は決して出來ない。

人は無理に強ひられて働くといふのは眞實でない。たとへ、一面に於て必要に迫られての勞作でも、一面には喜びが伴ふ。卽ち自己實現の爲に、自己の內界に溢れ出づる歡喜の表現の爲に働くのである。文明が進歩するに從ひ、人はその義務を增し、自己の爲めに喜んで勞作する。或人は、人はたゞ飢渴から追れんが爲にのみ働くのだといふが、これは誤つた見方である。人は、禽や獸のやうに唯物慾のために、强迫されて勞作するのではない。

實に人間ほど勞作する生物はない。人間は唯狹い小なる自我のために働くのではなく、世界の爲に働かうといふ要求をもつてゐるのだ。

卽ち、人は唯、小なる自我のために働いてのみ生活する事が完全な生活でない事を知つてゐる。又、人は其の現在より、より偉大なものである事を知つてゐる。而して、自我を超越し、現在を超越せんが爲に、卽ち彼が將にある可き筈のものたらんがために、人は勞作をつゞけるのである。而してこの勞作の中にこそ人間の光榮はあるのである。斯くて人は勞作する事によつて歩一歩その世界を押し擴げてゆく。印度の先哲は斯う敎へた。「人は爲さんが爲に生きざる可からず、生きんが爲に爲さゞる可からず」と。生命と勞作とは、相俟つて離る可からざるものである。

生命はそれ自身のうちのみで完きものではない——これは實に生命の特性である。生命は外界に出て來なければならない。生命の眞

理は內界と外界との交通にある。たとへば、我等の肉體はその內部に於て絕えず活動してゐる、心臟は一秒もその鼓動を中止せず、腦も胃も絕間なく動いてゐるが、これ丈ではまだ十分では無い。肉體は外部に向つても絕えず働きかけてゆく、肉體の生命は外界の勞作と遊戲との無限なる舞踊に肉體を導いてゆくのである。

心靈に於てもまた然りである。心靈はそれ自身の中にのみ生きて行く事は出來ない。心靈は絕えず外界の何物かを要求してゐる。單に內部意識を養ふばかりでなく、自ら外に向つて働かうとしてゐる。たゞ受入れるばかりでなく、また與へようとしてゐるのである。

肉體に於ても心靈に於ても、我等は內外二つの世界に於て完全に生くるを要する。何となれば、ブラマは二つの世界の純一な調和である

からである。二つの何れか一つにのみ生くる事は、彼自身を分裂すると同一である。分裂せられた生活に眞の生命は湧かない。

歐洲大陸では、人は唯外面的にのみ働いてゐる。彼等は其の勢力を外部に發揮するにのみ努めて、內部意識の充實を閑却してゐる。彼等の科學は常に無限無終の外界の進化について論じてゐる。その形而上學は今日神自身の進化をすら說くに至つた。彼等は神が「ある」なるものである事をゆるさない、彼等は神も亦becoming(なりつゝある)なるものと認める。而して彼等は、神――無限が、常に或る指示せられたる有限より、より偉大であると同時に、それは完きものである事を見落してゐる。ブラマは一面に於ては進化しつゝあるが、一面に於ては完全な存在である。而してこの兩面は、歌と唱歌者とが一致して離れ

ない様に一致してゐるのである。歌ふ事は前進的――進化的であるが、唱歌者彼自身の心の中には完全な歌が潜んでゐるのである。歌ふ事のみあつて、歌なるものが存在してゐないとどうして云へよう。

西洋の人々は、進化の一面のみ見て完全の一面を見無いのである。西洋人の弊は實にこゝにある。即ち彼等はあまりに外的の生活に執してゐる。が、印度人の思想生活の弊は其の反對に存する。印度人はあまりに内觀に偏し過ぎる。彼等は單に瞑想のうちにのみブラマを把握しようとし、嘗て進化の世界裡に外界の萬有と交通しようとはしない。彼等の信仰は法則を認めず、その想像は際限無しに翱翔する。彼等の睿知はブラマから取離す事の出來ぬ創造を忘れつゝ、唯、觀照の歡びに醉ひつゝブラマを索めようとしてゐるのである。

人は先づ法則を認めねばならない。丁度、琴の糸が張られてはじめて彈かれ、彈かれてはじめて音を發し、その生命そのよろこびを表現する事が出來るやうに、人も亦法則に束縛され勞作努力する事によつてのみ、その生命、そのよろこび、その眞の自由を發揮する事が出來るのである。「汝の成す業を凡てブラマに捧げまつれ。」心靈はその勞作を以てブラマに献げらる可きものである。神と人との合一を彼自身の孤獨な瞑想の生活の享樂裡に覓めてはならない。人類歴史の幾千年を通じて、日光にも暴風雨にも全人類が勞作し努力しつゝある人道の偉大なる衝天の伽藍を去つて、何處に神の國に詣る道があらう。私たちは孤獨の瞑想に入つてはならぬ。この世に面を背けて、どこにブラマの國を求め得ようぞ。臆病にも此の世界から遁れようとする者は、彼

自身をすらも發見する事は出來無からう。私たちは大膽でなければならぬ。而して、「我等は現にブラマに達しつゝある。現に今達しつゝある。」と叫ばなければならぬ。

ウパニシヤドは、ブラマの中に喜び、ブラマの中に働けるものを以て、ブラマを知れる最大人物とした。斯くの如き人は、必要に迫られて働くのではない、喜びがあふれて勞作となるのである。

而してブラマ自身も亦そのよろこびを、勞作の中に表現しつゝある。彼のよろこびは、溢れて勞作となり、萬有をその勞作の中に作つた。我等人類も亦その勞作の所産である。我等のすべては、ブラマの勞作によつて支へられてゐるものである。

我等も勞作せねばならぬ、勞作する事によつて與へねばならぬ。我

等の勞作をして自己のための勞作たらしめてはならぬ。我等の勞作をして隣人の爲め、ブラマの爲の勞作たらしめよ、而して、よろこびと勞作とをそこに全く一致せしめよ。

(七) 美の實現

我等に喜びを與へぬものは我等の心の重荷となる。しかも、我等が喜びの中にある時、我等に喜びを與へぬ何物があらう。

たとへば、醜といふものゝ如き、それは決して絶對なものでない。神は美なるものと醜なるものと二つを私達に與へたのではない、神自身が絶對純一の實在であるやうに、人類に與へられたる彼自身の表現は

悉く美でなければならぬ。それを、美と醜とに區別するは我等の實現が不完全であるからだ。すべて我等の實現が完全に遂げられてなければ萬事に差別が生ずる。卽ち我等の意識の中には、知られたるものと知られざるもの、快いものと快くないものとの區別が立せられて來る。が、我等の意識が發達してゆくに連れて、その區別は無くなつて行く。たとへば、科學は、日毎に進歩して今迄は測り知られなかつた、又測り知る事の出來ないものとしてあつた處へ深入りつゝある。我等の美感もそれと同じく、常に前へ前へと其の境界を擴げつゝあるのである。眞理は到る處にあるから、凡ての物は我等の知識の對象となる、美もまた到る處に遍く在る、だから、凡てのものは我等のよろこびの對象となるのである。

我等の理解力の幼稚な時には、生と無生との間に著しい區別を立てゐた。また、美と醜との間にも著しい區別あるものとして見てゐたが、理解が進むと共に、その區別は失はれて、萬有は皆喜びに充ち美に充ちてゐるといふ知識に達する。で、美を認むる最初にあつては、我等は周圍からその美を孤立させて見るといふ傾向があるが、後には凡てのものと、凡ての周圍とに調和されてゐるところの美を發見するに至るのである。――或る時代には、美は選まれた少數のものだといふ考へのために、それを小さな範圍におしこめて見た。しかし現代にはその弊が少なくなつてゐる。それ丈我等の理解が進んだのであるが、併し、我等は更に深く美の世界に入らなければならない。美の世界に入らうとするには、自我を捨てなければならない、低級な感覺や、利己、功利の念

からはなれなければならない。我等が無我無執になれば、美は隨所にその姿を示す。不快であるやうに見えたものが必らずしも不快でなく、不美の如く見えたものが必ずしも不美でない事がわかつて來る。

美は到る處に遍く滿ちてゐる。しかし、美の遍滿といふ事は必ずしも不美の存在を認めぬといふ事ではない。眞理に對して眞理ならざるものがある如く、美に對しても美ならざるものがある。しかし、それは絶對に不美としてあるのでは無く、たゞ不完全な美としてあるのである。美となる可能性を有しながら未だ美の域に達してゐないものがあるといふ意味に外ならない。

ブラマは絶對の眞理である。而して美はその眞理を異つた方面から觀て名づけたものに過ぎ無い。ブラマに於ては美も眞も純一である。我等は眞を感ずる事によつて宇宙の法則を知り、美を感ずる事によつて宇宙の調和を知る。法則を知る事によつて我等は自由を得、調和を知る事によつて我等はよろこびを得る。而して自由とよろこびとは同じものである。即ち眞と美とも亦同じものである。かくて美は、また善となり愛となつて無限に向つて動いてゆく。これを要するに、實在それ自身に就いて云へば、萬有は悉く美である。我等自身から云へば、我等の生活が完全なる生の實現であるならば、我等の創造は美であるが、然らざる場合には不美なる現象が生ずる。我等は我等の前に不美なるものなからしめなければならない、即ち生の實現を完からしめねばならない。

音樂は藝術の最も純なるものである。最も端的に美を表現し得る

ものである。我等は有限なものゝ中に表現された無限を音樂の中に聽く事が出來る。七月の雨の夜、牧場の闇が深い時、そぼふる雨がまどろめる大地の靜けさの上に幾重の面紗を漂はす時には、雨の囁きの單調は、音それ自身の闇であるやうにも思はれる。ほの暗く繁つた並木も、荒地の上に點々と、游泳者の漂へる頭髪のやうに茂つた叢も、濕へる草や濡れた大地のにほひも、或は村の草屋を包んだ闇の彼方に聳え立つ殿堂の尖塔も――あらゆるものが夜の心から湧いて來る諸律のやうに見える。空を充たせる小止みなき雨の一つの物の音のなかに彼等自身を混じつゝ、而して失ひつゝ――この單調な物音の中に、宇宙の美と眞とは潜んでゐるのである。だから眞の詩人、豫言詩人は、音樂的に宇宙の美と眞とを表現しようとする。ブラマが奏づる永遠の歌、純

一無限の音樂、その個々の旋律のなかに完全を含んだ音樂、有限のうちに無限の生命と歡喜とを湛へつゝ、刹那々々の滅びゆき、滅びる事によつて永遠の中に浸透してゆく宇宙の音樂――私等の生活の凡てはこの音樂の中に一となつて奏でられなければならぬ。その時、我等の生活は悉く美である、眞である。昨夜闇深い靜寂の中に、一人立つて私は永遠の妙曲を歌ふものゝ聲を聞いた。私は床に就いて斯ういふことを思うた。「私が眠つて無意識でゐるときも、なほ私の眠つた肉體の中に、空の星と足並を揃へつゝ、生の舞踏が運ばれてゐるだらう。胸はときめき、血は躍り、私の肉體の幾百萬の原子は、この宇宙の大樂師の手に奏でらるゝ琴の絃の諧律と、一つの調子に於て顫へてゐるであらう。」と。

(八) 無限の實現

ウパニシヤドは敎へて云ふ。「宇宙のもの凡ては神に包まれたるものと知る可し。與へられたるものを喜び、吾が有に非ざる富を欲する貪心を抱く可からず。」

我等が神を見出す事は、有限の中に無限を感じる事である。我等の神を求むるのは、神によつて利せられんが爲であつてはならない。我等は、我等の神を別莊や自動車や銀行に於ける債券などゝ同じ目錄のうちに書き加へてはならない。唯目を開けば朝日は其處に赫灼として輝いてゐる。我等がブラマを見んとすれば唯自已を棄てさへすれ

ばよいのである。「的の中に全く射埋められた矢のやうにブラマの中に凡てを沒入せよ。」とウパニシヤドは云つてゐるが、斯くブラマの中に包まれるといふ事は、我々の全生命の目的でなければならない。我等はすべての思想と行爲とに無限を意識し實現してゆかなければならない。

或人は云ふ。無限は人の達し得べき處では無い、だからそれは有つても無いに等しいものだと。若し無限に達する事を、それを所有するの意味に解釋したらば、誠に然うである。けれども人間の最高の喜びは、所有する事ではなく、得る事、否得ると共に失ふ事である。云ひ換へれば、我等の眞の要求は、所有物以上を得んとする事にある。女の子の心が人形の對手以上になれば女の子はその人形を棄てる。我等は物

を所有するその事によつて、自己が自己の所有物より偉大である事を知るのである。而して次へ〳〵と求め進んでゆく、即ち自分の所有物以上に超越し、それを放棄し放棄してゆく事によつて、自分の靈魂を實感し、永遠の生命の路を辿つてゆくのである。

人は完全ではない、更に進み進んで何者にかならなければならない、その何物にかならなければならないとするところに、無限があるのである。即ち人が得んとする時、所有せんとする時、人の生活は窮屈な範圍の中に限られて了ふ。が、「ならん」(ἔσ ὄν)とする時、我等は自由に無限の路の歩みを運び得るのである。「ならん」とは、勿論、ブラマと一つに「ならん」と欲するのである。西洋の人々の間には、神と一つになるといふ思想を以て神を瀆すものであるとするやうな謬見がある。これは、我

は父と一なりと喝破した基督の教へにも悖るものである。東洋に於ける信仰は、飽迄も神と一つにならんとするところにある。人はブラマと合一せねばならない、それによつて我等の最高完全を實現しなければならない。

人は常にブラマになりゆかなければならない。この「あること」と「なりゆくこと」との關係に永久の愛の彈奏があり、この神祕の奥底に宇宙の果し無い進行を支ゆる凡ての眞と美との源泉があるのである。

河は、「我海とならざる可からず」と歌ひつゝ流れてゆく。流れゆく河には安息の境は無い、平野、森、村、町――その移りゆく場所と場所とは遂に流れゆく河に安靜を與へない。けれどもいつかは海に達する、而してそこに無限の安息がある、流れ〳〵て汝の懷に入る時、そこに永遠の

眠りと安らけさがあるのである。而して、そこには、もう河と海との區別はない、河と海との間には何の境界線も無い。丁度これと同じやうに人もブラマとなるのである。人はブラマの中に入つてはじめて最終の平安を得る。而して人の凡ての動作は茲に目標を得るのである。即ち人のすべての動作は、その中にこの無限の安息を暗示して居る事によつて、はじめて其の意義を全うするのである。たとへば、詩の一句々々はその一篇の詩を活かすところの完全な思想に觸れ得て、はじめて其意義を發揮し、その任務を果すと同様である。その一篇を一貫した思想がわからないで、唯、一句々々を讀んだ丈ではさつぱりわからない、詩の一句々々は全篇を貫く思想の、完き思想の、その光に觸れてはじめて煌々と其の意義を輝かす。人生の萬事、皆亦然りで、無限の思想か

らはなれては全く其の意義を成さない。

ブラマはブラマである。完全の無限なる理想である。これを知るには喜びにより愛によるより外はない。知識を以てブラマを知る事は難い。それは知識は部分的で、もの〻分離解剖を教へるものに過ぎないからである。完全なるブラマは部分的なる知識を以て知る事は出來ない。ウバニシヤドが「我等は彼を知らず、されど我等は彼を知れるなり。」と云つた所以はこゝにある。唯、知識からのみ見たらばそれは空無に等しい。丁度、所有しようとのみ欲する時、無限に達する事が不可能であるが如く、知識によつてのみ求めんとする時、ブラマは我等に不可能のものとなるのである。併し、愛によつて喜びによつて、それははじめて我等に感ぜられるのである。言葉を換へて云へば我等は

合一によつてのみ彼と關係を保ち、全人格を以てのみ彼と合一する事が出來るのである。

我等がすべてを捨てゝ、ブラマに詣る時、彼は我等を花嫁として迎へる。凡てのものを投げ捨てつゝ、我自身をさへも捧げつゝ、我等が彼の懷に入る時、我等の結婚の祝は完くされる。而して喜びの歌が歌はれる。「汝の心をして我が心の如くならしめよ。」即ちこゝに於て我等は神の全きが如く全きものとなる事が出來、神の無限にして悠久なるが如く、無限にして悠久なる事が出來る。而して、ブラマと我等の間には何の區別もなくなる。彼は我である、我は彼である。此の this「これ」は他の this「これ」の絶對の目的である。此のこれは他のこれの絶對の財寶である。此のこれは他のこれの絶對の住家である。このこれは他

のこれの絶對の歡びである。かくて我等とブラマとの間は絶對の信愛によつて結ばれ、我等とブラマとは無限なる時のうちにありて完くせられる。

こゝに至つて我等はもう何物をも有たぬ貧しいものではない。我等が彼に趨る時、我等は有てるすべてのものを捨てゝ行つた。が、今や我等は無限なる彼の富の中に抱かれてゐる。靈の花嫁は、今や惠みと平安とに充たされてゐるのである。而して彼女は恰かも河流のやうに存在の一端に於て、彼女の完成の海に達し得た事を知る、而して他端に於て彼女は彼女が絶えず達しつゝある事を知る。一方に於てそれは永久の休らひであり完成である、他の一方に於てそれは絶えざる運動と變化とである。即ち is「あ、る」とto be「あ、ら、ん」とが不離

不斷の關係のなかに動いてゆくのである。換言すれば、我等はブラマの中に彼の信念を得んがためには、常にto beの憧憬を持つてゐる。我等は彼の境を覓めつゝあこがれてゐる、我等は神の懷にあるものでなければならぬ、しかもあると共に常に常に神の懷にあらんことの憧憬から離れる事は出來ない。卽ち彼の懷に安住すると共に、絶えず彼の懷から無限の新しき生命を掴み出さなければならぬ。

私は或る朝の未明に、前夜の祭りに集うて來た群衆のかすかな叫びをきいた。

「渡守！私を對岸まで渡して呉れ！」

對岸はどこにあるか？

それは汝自身の中にある、眞理の中に、汝の歡喜の海の中に、此方の岸

と彼方の岸とは一つである。それは汝の心の中にあるのである。彼方の岸は汝の心の中にあるのである。卽ち我等は我等の一身のうちにブラアマを宿してゐる。そして絶えず彼と一つにならん事を望んでゐるのだ。我等――卽ちこの岸と、ブラマ――卽ち彼の岸とは、同じく我等の心の中にあるのである。しかも我等の心が我が裏にある完全の感を失ふ時、彼の岸は我等が心から失はれる。

凡ての人々の爲に存せるものを、我が腕に捉へんとする時、他人を傷け自らを傷ける。而して彼は叫ぶ「私を渡して呉れ。」けれど我等が、「すべての我が勞作は皆汝のものなり。」と云ひ得る刹那、凡てのものはさながら我等がものとなり、我等は渡されて彼の岸に立つ事が出來る。

汝の家となされた我が家のうちでなくて、どこで汝に會ふ事が出來

よう。汝の勞作の中に織り込まれた我が勞作のなかでなくて何處に私は我と結ばれよう？　われ若し汝が家を出でたならば、我は汝の家に達する事が出來ない、もしわれ我が勞作を止めなば、我は汝の勞作の中で汝に逢ふ事が出來ない、何となれば汝は我のうちに住み、そして我は汝のうちに住むからである。汝は我なしに、我は汝なしには空無である。

我は我家の中「に於て、我等が勞作の中で「渡守！渡してお呉れ！」と祈る可きである。

——了——

大正四年五月十六日印刷
大正四年五月二十日發行
（定價金六拾錢）

ゴーリキーとルーゴ生の實現

著作者　中澤臨川
發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の九五十八號　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社　電話（番町）二二二三番　振替（東京）一七四二番

印刷者　東京市神田區本町五番地　高橋治一（中正社）

『ダゴールと生の實現』の姉妹篇――體裁裝幀同一――
兩書併せ讀んで這の大哲人の全面目を知る可き也

中澤臨川氏序　磯部泰治氏譯

タゴール作■暗室の王（附）郵便局

總洋布上製
定價六拾錢
郵送料六錢

大哲タゴールは、詩人として劇作家として實に稀觀の大才也。戯曲『暗室の王』及び『郵便局』は彼が代表作にして、その哲想の具體的表現也。彼が哲學と藝術との兩面を併せ窺ふ可きものとして大方に薦む。

本書出づるや世評籍甚たり
左に其一二を錄する事とす

▼世評一斑

▼帝國文學評　タゴールは今や思想界一部の驚異となり榮光となりつゝある。彼の哲學思想はその論文『生の實現』の中に於いて知る事が出來る。彼は哲學者であり、詩人であり、劇作家である。彼は其の劇曲『暗室の王』の中で、宇宙の生命と自己の靈との扉の開かれむ事を希ひつゝ尙ほ虛飾と傲慢との爲にそれを得ざるものゝ悲哀と、苦悶とを表はしてゐる。王妃が物質的外觀に眩惑されてゐる時に彼女は己が心の中に何物をも見出し得なかつた。けれども彼女が一度一切の虛飾と傲慢とを捨て塵の街道に赤裸々の自の姿を現はした時に、彼女の前には初めて『暗室の王』の扉が開かれ、彼女の前には初めて『暗室』の扉が現はれた。『郵便局』は彼が最近の戯曲である。この小さな戯曲に於て彼は無邪氣なる少年の靈を借りて生を求むるものゝ心を表現した。此の戯曲はカルカツタにて上場されて多大の喝采を博した。新らしき藝術の芳醇なる匂ひに醉はむとする者は一讀せよ。

▼六合雜誌評　タゴールの戯曲である。『暗室の王』は私たちに神を覓めんとするものの信從敬虔な生活を暗示するものである、『郵便局』は大自然のなかに生きんとする人間の心靈を暗示したものである。量から言つても質から言つても、前者は最も劇らしい劇であらう。後者は纏つた點から云へば最も良く纏りのついたものであらう。彼れの詩歌がさうであるやうに、彼れの戯曲も亦彼れの深幽な敬虔な哲學を語るものである。暗室の王のなかに明かに彼れが抱いてゐる神の觀念や、神と私たちの個我との關係が具體的に示されてゐる。『郵便局』によりて私たちは牢獄に囚へられた個我の解放を暗示せられる。彼れの戯曲は極めて神祕なそして宗教的色彩に富んでゐる。こゝに磯部氏の好譯を得たることはよろこぶべきことである。譯文も克くくだけた書き方である。磯部氏については又本誌々友諸君は屢々氏の麗筆に接しられたことであると思ふから玆に贅言しない。敢てこれを眞面目なる讀書家におすゝめする。

◀第一流評論家の自選評論集▶

現代評論選集

第一編■王堂論集■（再版）田中王堂著

第二編■片上伸論集■（再版）片上伸著

第三編■御風論集■（新刊）相馬御風著

第四編■阿部次郎論集■（新刊）阿部次郎著

現代の思想界評論界の中心にあつて、常に内的文明の指導者たり、新生活の開發者たる諸家のこれ迄の述作中、最も代表的なるものゝみを集めて輕便の冊子とし、一讀直に其要を了得せしめんとするの趣旨を以て發刊せるもの。あらゆる評論集の冠冕たる經典的選集也。

——▼表紙には著者自筆の題言を刷込めり▲——

■選集■

■臨川論集　中澤臨川著

■泡鳴論集　岩野泡鳴著

■長江論集　生田長江著

■續刊■

■抱月論集　島村抱月著

◀定價一冊參拾五錢■郵税一冊四錢▶

昇曙夢氏著（再版）□三千部限り特價壹圓五拾錢に減額す

■露國現代の思潮及文學

露西亞文學の最大權威者たる著者が半生の心血を傾倒して、組織的系統的に現代露國の思潮及び文學の兩方面を詳述詳論せるもの、新思想新文學に參する人の必讀書也。

總洋布極美本　定價壹圓八拾錢　小包料拾貳錢

森鴎外氏序　生田長江氏譯　□總洋布製□定價壹圓七拾錢□郵送料拾貳錢

■ニイチエ著　ツァラトゥストラ

ツァラトゥストラは獨りニイチエの代表作たるのみならず、實に、複雜多端なる眺近思潮その物の結晶體たり。誰か本書を讀まずして、よく新來の風潮を云爲するを得ん。

三版發賣　定價は從來に比し三割低減せり

相馬御風氏序　ドクトルメヂチーネ　羽太鋭治氏著

■近代文豪の肉體的研究

近代諸文豪に就いて、其の體質、病理を窮め、更にそれ等の思想、作品に及ぼせる影響を說くこと詳細を極む。最も價値高き研究にして、同時に亦最も興味深き讀物也。

新裝箱入美本　定價金六拾錢　郵送料六錢

泰西名著の完全譯

■新潮文庫■

洋布特製美本 一冊二百餘頁

▼一部貳拾五錢 ——郵稅四錢——

トルストイ 人生論 相馬御風譯
ゲエテ エルテルの悲み 秦豐吉譯
イプセン イプセン書簡集 中村吉藏譯
ツルゲネフ はつ戀 生田春月譯
ゴーチエ クレオパトラの一夜 久米正雄譯
ドオデエ 普佛戰話 後藤末雄譯
ピエルロチ 日本印象記 高瀨俊郎譯
ブリユウ 獨身婦人 中村星湖譯
バルザック 公爵夫人の秘密 高安月郊譯
トルストイ 光の中に歩め 阿部次郎譯
イプセン 人形の家 中村吉藏譯
トルストイ 性慾論 相馬御風譯
シエークスピヤ ロメオとヂユリエット 久米正雄譯
メエテルリンク 貧者の寶 吉江孤雁譯
シニツツレル アナトール情話集 秦豐吉譯
ピエルンソン フヨールドの娘 野尻抱影譯
ヘツベル ユウディット 中島清譯
シエークスピヤ ハムレット 久米正雄譯

▼以上は皆一冊讀切なり▲

マルコポーロ 旅行記(上下) 生方敏郎譯
アナトールフランス 女優タイス(上下) 生方敏郎譯
ダスタエフスキイ 白痴(第五編迄發行) 米川正夫譯
ダスタエフスキー 罪と罰(第四編迄發行) 中村白葉譯
ダアキン 種の起原(第四編迄發行) 大杉榮譯

▼現下の出版界、惟一の全譯叢書として聲價益々高し

71
498

終